

平成31年3月20日（水）

平成30年度 修了式式辞

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

「花道から見ていて思うんですよ。相撲というのは激しく過酷で、それでいて一瞬で終わるじゃないですか。その一瞬のために、本当に長い間、稽古してきているんです。勝つか負けるか全くわからない勝負に挑む、あの精神力ってすごいっす。稽古熱心な力士が土俵に向かう後ろ姿なんて、涙が出そうになりますよ」（朝日新聞 2019.3.17）

これは、金足農業高校から中央大学に進学し、学生横綱のタイトルを獲得、今年1月に引退した、元関脇豪風の押尾川親方（39）のインタビューでの言葉です。教師なら押尾川親方と同じような思いで、大会、受験や卒業式を迎える先生方も少なくありません。大会であれ受験であれ、これまで自らの課題に向き合い、3年間努力してきた生徒のことなら、なおさらです。各種大会や進路実現のための受験は、相撲と違って「激しく、過酷で、一瞬」ではないのかもしれませんが。しかし、「本当に長い間、稽古してきている」には、いろいろな学校で多くの高校生に携わってきた者として、共感せざるをえないところがあります。

第91回選抜高等学校野球大会に21世紀枠で選ばれた県立熊本西高校。グラウンド周辺は田畑。作物の生育に差し支えるため照明は設置できません。練習は、暗くなれば終わり。ただし、練習のための練習、ぼーっとした練習・野球はしません。ユニークな取組に、各自がテーマを選んで探究する課題研究があります。ある2年生が取り組んだテーマは、「甲子園の魔物とは」。本を読み、逆転試合を検証した結果は、「魔物などいない。試合には日常がそのまま出る、平常心が大切。」これは、試合当日の平常心の大切さを説くだけでなく、日常という日々の練習やその質こそが、ここ一番で問われるのだという指摘にもなっています。探究する力、考える力のある生徒、チームは成長します。勉学も同じです。

本校の校標「右文尚武」にきちんと向き合うことは、そう簡単なことではありません。自分の課題に向き合い改善していこうとする力、限られた時間を効果的に活用する力、実効性を確信できる努力の工夫、学びに向かう力、自ら考える力、そしてそれらを継続する力が求められます。つまり、高校生として、自分をよりよい方向に成長させようとする、自ら自己をマネジメントする力が重要です。もちろん本高生の中にも、また県内、全国には、将来の夢や自己実現のために、日々充実感や達成感をもって、これをやり遂げている高校生は少なくありません。機会は誰にでも与えられています。だから、自己管理能力、自主自律が求められます。

二学期終業式の式辞で、ノーベル医学生理学賞を受賞した本庶 佑 先生の「6つのC」を紹介しました。若者が自らの道を切り拓いていくのに必要な「6つのC」とは、

Curiosity（好奇心）、**Challenge**（挑戦）、**Courage**（勇気）、

Confidence（自信・確信）、**Concentration**（集中）、**Continuation**（継続）

のことでした。これは、部活動でも、勉学でも、あるいは将来社会人になった時でも、人を成長させるキーワードだと思います。どれか一つぐらい欠けてもとれないところに、本質を言い表す言葉のまとまりとなっています。

将来、一人一人がよりよく社会的自立を果たすための、本校のキャリア教育のテーマ「未来への眼差しが、今を輝かせる」を、自己管理能力、自主自律によって「6つのC」とともに取り組み、未来を拓く確かな学力とともに、将来に生きる豊かな人間力を身に付ける生徒が、今後も一人でも増えていくことを切に願って、式辞とします。